



# 北方民族博物館だより

No.99



H3.4 <sup>がせい</sup>牙製人物像 チューレ文化期（西暦1000～1800年頃）  
米国／アラスカ出土 8.5cm

セイウチの牙を素材として作られた小型の人物像である。彫刻によって成形された後、全体を丁寧に研磨して仕上げられる。手足の表現は省略されるが、顔の部分に目、鼻、口が彫刻で表現され、胸には衣服を表現したと考えられる線刻が鋭利な加工具によって施される。

本資料が製作されたチューレ文化は、アラスカからグリーンランドまでの地域に広がっていた文化で、アラスカでは西暦1000年から1800年頃にかけてみられた。先史エスキモー文化の高い彫刻技術を示す資料である。

## 目次 Contents

- 1 表紙 牙製人物像
- 2 - 4 第30回北方民族文化シンポジウム網走「北方民族研究30年ー成果・課題・博物館の役割ー」
- 5 北海道博物館紀行「ポー川史跡自然公園」／講習会「お細工物 すずめ」
- 6 講座「アムール流域・ナーナイの文化」／講習会「ナーナイの文化のワークショップ」
- 7 講座「寒いところにいるコウモリの世界」／講座「アザラシと人」
- 8 INFORMATION

## 第30回北方民族文化シンポジウム網走

# 北方民族研究30年 —成果・課題・博物館の役割—

2015. 10. 24-10. 25

会場 オホーツク・文化交流センター  
(エコセンター2000 大会議室)

北方民族文化シンポジウムは、北方諸民族の伝統文化や歴史、社会、現状に関するさまざまなテーマを取り上げてきました。本シンポジウムが第30回目を迎えるのを機に、北方民族文化を対象とする諸分野の視点から、北方民族研究の近年の成果と課題、博物館との連携等について検討しました。以下に各講演・発表の概要を紹介します。

### 記念講演

「ロシア極東における文化的多様性維持のための問題と取り組み」

エーリッヒ・カステン氏（シベリア文化財団）

危機に瀕した文化的多様性の維持は世界的に重要な課題である。本講演では、研究者がいかにこの責任に応えることができるのかを検討するとともに、我々が特に先住民社会に対して適切な情報を提供するために開発してきた多様な方法について論じる。

これらの目的を達成するため、新たなマルチメディア方式が有用である。その方法を用いれば、360度写真、先住民言語による適切な情報の録音、それらの製作と使用する動画、デジタル化した文献資料などを取り込むことができる。さらに、この重層的で複雑な情報を、多様な目的や異なる比較的視点に沿って整理することができる。例えば、あるテーマの通時的な評価や、隣接する集団間における特定の文化的慣習の比較などである。



エーリッヒ・カステン氏

### 第1部：ロシア・シベリア地域における状況

「シベリア・極東ロシア調査の30年」

佐々木 史郎氏（国立民族学博物館）

シベリアと極東ロシアは日本の人類学、民族学にとって主要な研究地域の一つだった。しかし1930年代以後、ソ連は日本人研究者をこの地域から閉め出し、続く冷戦時代には全ての西側研究者を排除した。ペレストロイカを契機に状況が変化し、1980年代末頃からジャーナリストや研究者を入れる動きが始まり、ソ連崩壊後、日本を含む旧西側の研究者がシベリア・極東地域にだれ込む状況となった。

北方民族博物館の創設はちょうどその時期であり、本シンポジウムはその少し前の1986年に始まった。本シンポジウムと北方民族博物館の歩みは、日本の新しいシベリア・極東ロシア研究の歩みとほぼ同期しているのである。



佐々木 史郎氏

### 「シベリアの文化人類学の変化と展望」

渡邊 日日氏（東京大学）

1990年代にフィールドワークが可能になって以来、シベリアにおける文化人類学的研究は英米圏や日本で大きく発展した。その軌跡は、社会主義、ポスト社会主義の人類学的研究のそれと一致し、ナショナリズムの勃興、生産組織の民営化、歴史的記憶の様相などが、旧社会主義圏で広く共通して論じられた。しかし近年は、テーマの拡散に伴い、旧社会主義圏が「特殊」な研究領域でなくなってきた。こうした研究動向の変化は、（ポスト）社会主義の人類学とシベリアの人類学との関係を考えさせるものである。

本報告では、英語圏におけるシベリアの人類学研究に焦点を絞り、これまでの到達点を概観し、今後を展望するとともに、日本のシベリア研究の課題、博物館が果たすべき役割についても検討した。



渡邊 日日氏

## 第2部：北米・北太平洋地域の状況

「侮辱への対抗：北太平洋地域の先住民・文化の保護に関する文化人類学・博物館の努力についての歴史的視座」  
デイビッド・ケスター氏（アラスカ大学フェアバンクス）

18、19世紀に北太平洋地域を訪れた征服者、交易者、探検家・科学者による記述には、先住民に対する意図的な侮辱が含まれたものがある。20世紀には、侮辱的評価を否定したり、それらに反論する文化人類学的陳述もみられるようになり、多様な文化的記述や博物館展示は、中立的あるいは称賛的、侮辱的に扱われた。

本発表では、多くの事例から、北太平洋地域に関する民族誌や博物館の表象における反・侮辱の遺産を検討した。



デイビッド・ケスター氏

「北アメリカの北太平洋沿岸地域と極北・亜極北地域の先住民文化に関する文化人類学研究の最近の動向  
—日本人人類学者および日本の博物館・大学による貢献—」  
岸上 伸啓氏（国立民族学博物館）

日本における北米北方地域研究は、1960年代の岡正雄、原ひろ子に始まる。1980年代以降はカナダ北西海岸先住民、北太平洋沿岸地域言語、北太平洋文化圏の研究が展開され、1990年代以降は北方民族博物館や国立民族学博物館によ

る国際シンポジウム、展示活動が研究を牽引してきた。

本発表では、1980年代以降の日本の北米北方先住民研究の展開を紹介し、その特徴を検討した。日本では生業や社会変化に関する研究が展開した一方で、21世紀に入り若手研究者の減少問題に直面している。日本の大学・大学院での北方先住民研究コースの整備が望まれる。



岸上 伸啓氏

## 第3部：北方文化研究諸分野の立場から

「オホーツク海沿岸の考古学—成果と展望—」

高瀬 克範氏（北海道大学）

過去20年のオホーツク海沿岸地域の考古学は、国際共同調査の活発化によって特徴づけられる。遺物や遺跡に関する情報の共有により、共通の議論の土台が整備され、その上で旧石器・新石器遺跡年代の再検討、詳細な編年体系の構築、集団移住史や地域間関係の高解像度復元、黒曜石元素分析の広範な適用など、大きな成果が得られてきた。

一方、1) 次世代研究者の育成、2) 研究対象地域の細分化、3) 関連分野との連携、4) 博物館との連携などの点で課題も残されている。このうち2)～4)を解決するために考古学が担う役割が非常に大きいことを、北千島・南カムチャツカの具体的事例にもとづいて検討した。



高瀬 克範氏

### 「日本における北方諸言語研究の過去・現在・未来」

呉人 恵氏（富山大学）

日本における北方諸言語研究は、1990年代以降めざましく活発化した。現地調査に基づく記述研究に取り組む研究者が育ち、重要な成果が挙げられてきた。しかし一方で、話者の高齢化や減少、優勢言語への同化により、言語の復興保持はおろか、新たな言語事実を掘り起こす可能性も年々低下している。加えて、若手として出発した研究者たちも研究を総括し、次世代へ引き継ぐ年齢に達している。

本発表では、各言語の専門家に対しておこなったアンケート調査から、過去四半世紀の北方諸言語研究の成果を総括し、今後の研究の方向性と可能性を検討した。



呉人 恵氏



大坂 拓氏

### 「北方民族文化シンポジウムの30年」

笹倉いる美（北海道立北方民族博物館）

1986年に第一回目が開催された北方民族文化シンポジウムは、今回で30回を迎えた。これほど長く続くシンポジウムは少なく、北方民族文化に特化しているという点では唯一の存在だろう。本シンポジウムは、当初は北方民族博物館の開館に向けて網走市が主催し、開催したものであるが、1991年の同博物館開館以降も開催され続けている。

本発表では、北方民族博物館や北方民族文化研究を取り巻く状況の変化とともに、本シンポジウムの30年間の成果をふりかえり、今後のシンポジウムと北方民族博物館の展望について述べた。



笹倉いる美

（学芸グループ 中田 篤）

## 第4部：博物館の立場から

### 「先住民と博物館—北海道博物館における展示事例」

大坂 拓氏（北海道博物館）

平成27年4月、北海道開拓記念館と道立アイヌ民族文化研究センターが統合し、北海道博物館が誕生した。本報告では、同博物館におけるアイヌ文化展示の特色を紹介した。

北海道博物館では、アイヌに関する展示は第2テーマ「アイヌ文化の世界」で主に取り扱われる。第2テーマは「1. 現在を知る」、「2. 伝統を学ぶ」、「3. ことばを聴く」、「4. 歩みをたどる」の各小テーマから構成される。このうち「1. 現在を知る」は、札幌市在住の小学生が祖父母の語りから先祖の歩みを学ぶというストーリーで、アイヌの近現代史をリアルな生活体験として想像する機会を提供している。また、第2テーマ以外の展示にも、非明示的にアイヌの歩みが含まれている。こうした展示で伝えられる範囲の限界、その他の手法で補完されるべき事例について検討した。



シンポジウム会場の様子

## 北海道博物館紀行

### しべつ 標津町ポー川史跡自然公園

2015. 9. 5

講師 <sup>すぎた みつあき</sup> 梶田 光明 氏（元標津町ポー川史跡自然公園長）

講座「北海道博物館紀行」では、毎回道内の博物館の関係者を講師としてお招きし、それぞれの博物館の展示内容や活動などについて紹介いただいています。

平成27年度第2回目となる本講座では、標津町ポー川史跡自然公園を取り上げ、元ポー川史跡自然公園長の梶田光明氏にお話をいただきました。

公園は、標津市街から海岸沿いに北へ4kmの伊茶仁地区にあります。昭和55（1980）年に開設され、歴史民俗資料館などのビジターセンター地区、国の天然記念物の標津湿原、国の史跡の標津遺跡群から構成されます。

標津湿原では、調査によって2箇所の高層湿原域が確認されています。植物が枯れた後も分解されずに泥炭となり、まわりから水が入り込めなくなるほど高く堆積した湿原のことを高層湿原といいます。

標津遺跡群は、伊茶仁カリカリウス遺跡、<sup>ふるどう</sup>古道遺跡、三本木遺跡からなり、地表面のくぼみによって確認される<sup>たてあな</sup>竪穴住居の数は全体で約2500軒にもなります。遺跡の時期は、縄文時代、続縄文時代、オホーツク文化期、擦文時代、そしてオホーツク文化末期のトビニタイ文化期と、長い期間にわたります。

講座では、ポー川史跡自然公園開設に向けて地道な準備が進められてきたことも紹介されました。昭和46、47年の伊茶仁遺跡の発掘調査、昭和49、50年の町内遺跡の分布調査、昭和48年の湿原植生調査が実施されたことで、遺跡と湿原が良好な保存状態にあることが確認されました。昭和52年には、文化庁の主催により標津町の遺跡群をモデルとして、「広域遺跡保存調査研究」が開催されました。この際示された構想をもとに、昭和55年、標津町開町百年記念事業として公園の開設が進められたのです。

開園後も整備は続けられ、ポー川史跡自然公園はいまも発展を続けています。

（学芸グループ 種石 悠）



梶田 光明 氏

## 講習会

### お細工物 すずめ

2015. 10. 10

講師 浜田 智津子 氏（お細工物作家）

昨年好評だったお細工物の講習会を今年度も開催しました。講師は北見市在住の浜田智津子氏です。

お細工物は「縮緬（ちりめん）」とよばれる絹をつかった手芸品です。季節や自然、縁起物、古典等を題材にし、<sup>びな</sup>吊るし雛や、袋物など、さまざまなものが作られてきました。

京都府舞鶴市でお細工物を学んだ浜田氏は、伝統的なお細工物のほか、オリジナルの作品を次々とうみだし、品のある作品は大勢のファンを惹きつけています。



浜田 智津子 氏

今回の講習会では、「こて」をつかい、網走名産の「しじみ貝」をベースにした「すずめ」を二羽つくりました。

しじみ貝に柔らかくもんだ和紙を貼り、そのうえに縮緬を貼

ります。この時こてを上手に使うと、しじみ貝の曲線に従って、縮緬がきれいにのびてゆきます。

尻尾は、型に、薄く綿をのせ、その上から縮緬を貼ってつくります。くちばしの型にも縮緬をはり、その両脇に目（黒ビーズ）を縫い付け、最後に、パーツを組み合わせます。

しじみ貝を貼り合わせた境には、打ち紐をあしらって、かわいらしいすずめが何羽もうまれました。

非常に細かい作業に苦戦し、初めて使うこてにも、最初は戸惑い気味だった参加者も、時間とともに慣れて最後には上手に使えるようになりました。

浜田氏が材料に用意くださった縮緬は、江戸から大正にかけての古いもので、参加者はそうした古裂が作品としてよみがえることも楽しまれていました。

（学芸グループ 笹倉いる美）



できあがった作品

## 講座

## アムール流域・ナーナイの文化

2015. 9. 19

## 講習会

## ナーナイ文化のワークショップ

2015. 9. 20

講師 A.P.ドンカーン氏（芸術家）

小野寺マリレイ氏（芸術家）

第30回特別展「森と川の精霊とともに ロシア・アムール地方のアート&クラフト」の関連事業として、講座「アムール流域・ナーナイの文化」を開催しました。

講師のA.P.ドンカーン氏と小野寺マリレイ氏は現在ドイツのフィヒタッハ市在住で当館のもよおしのために来日されました。

ナーナイ出身のドンカーン氏は、ロシア（ソ連）で船員をしていましたが、芸術家の道を志してハバロフスクの芸術系の教育養成大学にすすみ、彫刻制作などを行っていました。

平成5（1993）年には北海道平取町に当時住んでいた故・萱野茂氏の招きで、初めて日本を訪れ、このとき北方民族博物館にも寄られました。その縁から、北方民族博物館のアムール地方における資料収集に協力くださることになりました。このことがきっかけとなりドンカーン氏の心のなかに「ナーナイの文化を復活させたい」という気持ちがわき上がり、パートナーの小野寺マリレイ氏と共同でウラジオストク市に「アムール・アート・ミュージアム」を開設するにいたりしました。

また、資料収集活動のなかで、魚皮づくりの名人であるナーナイ女性のヴェラ＝ホジャルさんに出会います。魚皮づくりに際だった技をもっていたことで知られるナーナイですが、布を利用するようになると自然になめしの技術はすたれました。ヴェラさんとの出会いにより、ドンカーン氏は、強く魚皮を作りたいと思うようになりました。ロシアでは魚の皮を手に入れるのが案外難しいため、ロシアを出て、魚皮をつくる研究をはじめます。



魚皮を張った太鼓を叩くドンカーン氏

2005年には魚皮のなめし技術・作品を紹介する「フィッシュレザーミュージアム」を開設しています。

研究の結果、ドンカーン氏は安全な植物由来のタンニンに

よる魚皮なめしに成功し、これを材料にして衣服やアクセサリを開発しています。小野寺氏は魚皮の素材によりかかることなく、世界に通用するデザインにすることが必要であると強調されていました。

ドンカーン氏と小野寺氏の作品は、ドイツをはじめヨーロッパ各国でも数多く展示されています。

現在、ドンカーン氏は故郷を離れて活動していますがいつもナーナイ文化の振興のことを考えています。

講座では、参加者一人一人に魚の皮が渡され、もんでやわらかくする体験を行いました。ドンカーン氏の作品紹介や、魚皮製衣服のファッションショーもあり、参加者は魚皮のしなやかさや丈夫さを実感されていました。

講座の翌日には、講習会「ナーナイ文化のワークショップ」を開催し、ドンカーン氏がなめした魚皮をつかって、まちのついた小型のポーチをつくりました。

ドンカーン氏と小野寺氏が作っている魚皮は、ドイツの魚加工会社からだされる廃棄物が材料になっています。ヨー



ワークショップの様子

ロッパでも魚食がブームになっていて、ここでサケが切り身に加工されているそうです。

ワークショップでは、一人に一枚（半身分）の皮がわたされました。作業はこの魚皮を型にしたがって切るること

からはじめました。持ち手も魚皮で作ります。

本体となる魚皮の端に、目打ちで小さな穴をあけ糸でかがってゆきます。穴のあけかたは、作品が美しくなるよう計算されていました。

目打ちで穴をあける際にはドンカーン氏が手助けをし、その際参加者は個別にドンカーン氏と会話を楽しまれていました。

ドンカーン氏のこだわりのため、やり直しとなる参加者もありましたが、二つと同じものがない作品ができあがりました。

このほかお二人には9月21日に特別展示室で観覧者への解説活動を行っていただきました。

（学芸グループ 笹倉いる美）



特別展示室で解説をするドンカーン氏（左）と小野寺氏

## 講座

## 寒いところにいるコウモリの世界

2015. 11. 21

講師 近藤 憲久氏（道東コウモリ研究所 代表）

ロビー展「北の人びとと動物たち」の関連事業として、北海道のコウモリ研究の第一人者である近藤憲久氏より、北方に生息するコウモリについて紹介いただきました。

コウモリは世界中に1,100種余り、そのうち日本には36種、北海道には19種生息しています。南の動物というイメージが強いコウモリですが、なかには北極圏など北緯70度を超えて生息する種もあります。たとえば網走にいるキタクビワコウモリという種は、ノルウェーのタナという町（北緯70度26分）にも生息しています。キタクビワコウモリはコスリカや蛾などの昆虫をもりもり食べるそうです。体重わずか10g前後（1円玉10枚ほど）の1個体が、1日500匹もの蚊を食べるといふから驚きます。

しかし昆虫をとれないくらい寒い時季や地域では、どのように生活しているのでしょうか？ 疑問のわくところですが、コウモリの研究は日本の哺乳類のなかで一番遅れており、特にコウモリの冬の生活史はほとんどわかっていないのだそうです。

講師の近藤氏はもともとネズミを専門に研究していましたが、根室市の学芸員に在職中の2000年にコウモリの研究を開始されました。2013年の定年後、大空町に拠点を移し、2015年現在もなお精力的に調査を行っています。本講座ではこれまで



近藤 憲久氏

訪れた調査地として、北海道東部のほか、北方四島の択捉島や国後島などが紹介されました。16年間にわたる調査で捕獲したコウモリは15種5,972個体にもなるそうです。それでも「まだまだ」と近藤氏は言います。

本講座ではスライドで調査の写真や具体的なデータを示す図表やグラフなどを数多く紹介されました。なかには夜の海で船から身を乗り出して虫捕り網を振り回し、海上を飛ぶコウモリを捕る写真もあり、危険をものともせず調査に取り組まれるようすが印象的でした。

近藤氏をひきつけてやまないコウモリ研究の特徴は、神秘的だそうです。それはまさにコウモリという動物のもつイメージそのものです。

本講座には近藤氏とともにコウモリ調査・研究に取り組む学生さんも参加し、熱心に聴講されていました。担い手の少ない研究分野ですが、若手が育成されています。研究の進展によって将来的に多くのことが明らかにされれば、コウモリのもつ神秘的なイメージも変わるかもしれません。

（学芸グループ 山田 祥子）

## 講座

## アザラシと人

2015. 11. 28

講師 小林 万里氏（東京農業大学生物産業学部 教授）

開催中のロビー展「北の人びとと動物たち」の関連事業として、北方民族ともかかわりの深いアザラシ類の生態や人との関係について、わかりやすくお話しいただきました。



小林 万里氏

アザラシ類は、分類上は<sup>ききやくもく</sup>鰭脚目と呼ばれるグループに属し、海での生活に適応した流線型の体型や身体の仕組みを持っています。北海道近海にはワモンアザラシ、アゴヒゲアザラシ、クラカケアザラシ、ゴマフアザラシ、ゼニガタアザラシという5種のアザラシが生息しています。

近年、アザラシを取り巻く環境の変化により、その生態や行動にも変化がみられるようになっていきます。北海道近海では、禁猟に伴ってアザラシ類の個体数が増加し、移動性の高いゴマフアザラシの分布はオホーツク海から日本海側へと拡大しています。

こうした変化に伴い、アザラシによる漁業被害も増えています。太平洋側のサケ定置網のうち、特に被害が深刻な場所では、毎日のようにゼニガタアザラシが網に入り、サケを食害しているとのことです。

アザラシ類はさまざまな魚を食べる海の高次捕食者であり、シャチ以外には天敵がほとんどいません。そのため、アザラシがこれ以上増加すれば、漁業被害がさらに拡大するだけでなく、海の生態系バランスが崩れてしまう可能性もあります。こうした状態を改善するためには適切な個体数管理が必要ですが、海を生活の場とするアザラシの捕獲は難しいため、今後効果的な駆除方法を開発していかなければならないということです。

（学芸グループ 中田 篤）



参加者からの質問に答える小林氏

## ロビー展 オホーツクシリーズ⑨

## 写真展 北の状景から

北方民族博物館では、オホーツク地域の文化的活動を紹介・発信する展示プロジェクト「オホーツクシリーズ」を開催してきました。第9回目となる今回のテーマは、昨年度に引き続き、「北の状景から」です。

オホーツク地域を活動フィールドとするアマチュアカメラマンの方々に作品を提供いただき、写真や映像作品を通じて自然の景観、四季の移り変わり、そこに住む人びとの暮らしや文化などを紹介します。短期間の展示ですが、オホーツク地域の魅力を感じていただければ幸いです。

■会期：平成28年1月9日(土)～1月24日(日)

■会場：北方民族博物館ロビー（観覧無料）

サハリンの先住民ウイльтаの  
冬の住居模型  
(企画展展示予定資料より)



## 企画展

## 雪と氷と北方民族 ～北の人びとの冬の暮らし

冬、北方圏は雪と氷に覆われます。北にくらす人びとは、厳寒期の雪や氷をどのようにして克服し、環境に適応してきたのでしょうか。多数の美しい雪結晶写真とともに、北方民族が冬の暮らしに用いてきた衣服や道具の展示を通して、かれらの知恵と工夫を紹介します。

■会期：平成28年2月6日(土)～4月3日(日)

■会場：北方民族博物館 特別展示室（観覧無料）

## ■関連事業

平成28年2月6日(土) 13:30～15:00

講座 「カムチャツカの氷下漁」

講師 大島 稔氏（小樽商科大学教授）

平成28年2月14日(日) 13:30～15:00

中垣哲也オーロラ上映会&トークライブ

出演 中垣 哲也氏（オーロラ写真家）

平成28年2月20日(土) 13:30～15:00

講座 「雪と氷の神秘」

講師 亀田 貴雄氏（北見工業大学教授）

## INFORMATION

## ■ 行事報告

◆7月1日(水)～10月23日(金)、ウェルカムケース展示「イヌイト／エスキモーのクリベッジボード」を行いました。

◆11月3日(火・祝)、第7回はくぶつかんまつりを開催しました。

今年も、ロシア料理ボルシチの無料提供など、多くのイベントが盛況でした。



投げ縄を楽しむ参加者

◆11月28日(土)、はくぶつかんクラブ「バターとチーズを作る」(講師：中田篤主任学芸員)を開催しました。



バターを作る参加者

◆10月31日(土)～11月29日(日)、ロビー展「北方民族博物館収蔵資料展 アイヌ文化の捧酒箸」を開催しました。

捧酒箸は、アイヌ語でイクパスイと呼ばれる、神に酒を捧げる際に用いる木製、ヘラ状の儀礼具です。



捧酒箸(展示資料より)

◆11月10日(火)～11月29日(日)、ロビー展「北の人びとと動物たち」を開催しました。北方民族の動物利用について、関連資料や触れられる毛皮の展示、映像などを通じて紹介しました。



本物と同じ重さのアザラン模型をひっぱる体験コーナーの様子

## ■ お知らせ

◆岡田淳子当館館長が、平成27年度地域文化功労者として表彰されました。

地域文化功労者表彰は、全国の各地域で芸術文化の振興や文化財の保護など、地域文化の振興に功績のあった個人や団体に対し、その功績をたたえるため文部科学大臣が行います。

功績概要は、「永年にわたり、北海道文化財保護審議会委員等を務め、地域文化の振興に貢献している」というものです。11月18日に東京の文部科学省で表彰式が行われました。

### 北方民族博物館だより No. 99

平成27(2015)年12月25日発行  
編集・発行 北海道立北方民族博物館  
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1  
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889  
e-mail: tonakai@hoppohm.org  
http://hoppohm.org

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会